

「商品形態の物神性」

—廣松物象化論と宇野経済学

矢野 俊平

はじめに

1. 永谷清による廣松物象化論評価
2. 価値形態論の形成と課題
3. 「商品形態の物神性」

結びに代えて

はじめに

「経済学と呼ばれている学問は、その最良のものでさえ、〈商品生産の諸関係の内部に囚われている人々〉に対して〈社会的に妥当する〉そのかぎりで〈客観的〉な事態を理論的に定式・表現したものにすぎず、存在論的・認識論的にみるとき、所詮は物象化された対象認識の埒内に」ある。⁽¹⁾これは、哲学者・廣松渉による経済学観である。

『資本論』を物象化論として読む廣松著『資本論の哲学』の発刊は、同著『マルクス主義の地平』(1969年)をはじめとして、矢継ぎ早に発刊された著書の数々からある程度は予測できたこととはいえ、経済学徒にとっては、具体的に『資本論』商品論の解釈を示したものとして、同著『「ドイツ・イデオロギー」編輯の問題点』(1965年)⁽²⁾を眼にした時以上の衝撃的なことであった。しか

しながら、廣松の『資本論』解釈・「改釈」は従来の解釈に対するいわば全面的批判であるにもかかわらず、旧来のマルクス派の経済学サイドから十全たる反応を受けて来たとは言いがたい。

『資本論の哲学』初版の刊行は1974年（同書を構成する一連の論文の初出は1973年から）であるが、最新の資本論講座である種瀬茂・他編『資本論体系』第2巻（有斐閣、1984年）において、「研究と論争」をサーヴェイしているはずの「〈価値の実体〉規定をめぐる論争」や「価値形態論と交換過程論・貨幣の必然性に関する論争」を扱った論考では、廣松のこの著書には一言も触れられていない。同書の「物神性論に関する諸学説」を対象とした西野勉論文では、さすがにマルクスにおける初期疎外論と後期物象化論との関係についての「断絶＝非連続説」の代表的所説として取り上げられてはいるが（「断絶＝非連続説」という位置づけには、「断絶＝非連続」を主張したことの無い廣松は、不満であったろう）『資本論の哲学』には論及されていないし、同論文の「『資本論』における物神性論（物象化論）についての諸説」の項では関説されてもいない。「断絶＝非連続説」に基づく『資本論』「改釈」は問題圏の外という扱いであろうか。

また、降旗節雄編『クリティーク経済学論争』（社会評論社、1990年）においてですら、降旗には廣松・今村仁司との鼎談や批判論文（これは廣松存命中の、経済学者からの数少ない反応の一つであった）があるにもかかわらず、無視されている。いずれにしろ、第三者的に見て、それらが諸研究・論争を対象とした論考である以上、フェアな取り扱いとは言えないであろう。確かに、廣松の『資本論』解釈には、難解な廣松固有の哲学が背後にあると思われ、経済学プロパーの者からすれば論及し辛い所説ではあるのだが。

こうした経過のなかで、廣松逝去後ではあるが、いわゆる宇野経済学の立場から直接、廣松の『資本論』解釈を対象とした幾つかの著作や論考が現れてきた。⁽³⁾ 本稿はそのなかの、永谷清「価値形態論と物神性論—宇野経済学 対廣松物象化論」⁽⁴⁾ の前半部分を取り上げ、第三者として、⁽⁵⁾ 若干のコメントを付すものにすぎない。したがって『資本論』の「商品物神性」論自体を論じるものではない。

永谷清には最初の単著『資本主義の基礎形態』以来、数冊の著書があるが、

『資本論』の「商品物神性」論自体を、「科学とイデオロギーの峻別」という命題(?)に支えられてか、否定的に捉える論者の多い宇野学派の論者のなかであって、むしろ重視する論者であると思われるからである。それだけではなく、宇野「原理論」において「物神性」論を放擲しないとすれば、永谷のごとく、「商品形態の物神性」と「商品生産の物神性」の差異を明確にする立場は、廣松批判とは別に、「流通形態論」から「生産論」へという構成をとる宇野「原理論」体系としては一貫性を有していると考えられるからでもある。

1. 永谷清による廣松物象化論評価

永谷の論文「価値形態論と物神性」は4節からなるが、内容的には、廣松の「問題提起」を限定付きで認め、『資本論』商品物神性論の「問題点」を指摘したうえで、永谷独自の解釈・積極説を展開することを通じて、廣松説を批判すると同時に、宇野「原理論」の不十分性を指摘するものとなっている。

以下、永谷の記述を追いながら、コメントを付していくことにしよう。[]書きの部分は特に断らない限り筆者が加えたものである。

永谷は本稿冒頭に引いた廣松の「経済学批判」にたいして、これは「近代経済学をも含む経済学全体に向けられたものであるにしても、当面の主対象としては日本の宇野経済学が考えられていると見ることができる」としている。

いわゆる宇野経済学が経済学の「最良のもの」であるか否かは別にして、確かに、永谷自身が指摘しているように、商品物神性論を「商品論にとってのみならず『資本論』全体の理解にとって、決定的に重要である」とする廣松の解釈は、その限りでは、商品物神性論(『資本論』第2版、第1章第4節)と交換過程論(同、第2章。以下、とくに限定しない限り「商品物神性論」「交換過程論」等の語で第2版の当該章節を示す)とを切り捨て、第2版第1・2章を「価値形態論を中心とする商品形態論として再構成した」宇野「原理論に対決している」と見ることができる。

こうして永谷は、『資本論』「商品論」を「単純商品生産社会」論と解してきた「通説」的立場とも、また「市民社会」論と解する平田清明⁽⁶⁾らとも異なる

り・「商品世界」論と解する廣松と宇野経済学との対立点を、「商品論での価値の実体規定は正しいのか否か、という問題に集約されると言うこともできる」としている。こう記すと、永谷が廣松「商品世界」論を「従来の単純商品社会論や、商品論での価値実体規定の是非、という論争の中に解消しよう」というように見えるが〔筆者には結論的にはそうなっているように見える〕永谷自身の意図はそこにはない。

この「商品論での価値の実体規定は正しいのか否か」という言い方は、廣松が「実体論的规定」としている以上、廣松説の解釈としては必ずしも適切ではないと思われるが、ここでは形式的な単に表現上のものとしておこう。

廣松『資本論の哲学』が宇野弘蔵と久留間鮫造との価値形態論争に「触発されたもの」とみる永谷は、この論争に触れたあと、価値形態論の課題について、宇野と廣松との見解の差異を、正確に次のように述べている。

価値形態論（それは『資本論』初版本文・同付録・第2版へと書き改められ、相対的価値形態と等価形態の「対極性と形態規定性を強化して」いったのだが〔これは、永谷の評価〕の課題を宇野は、第2版の「ブルジョア経済学によっては、一度も試みられたことのないこと、すなわち貨幣形態の生成 Genesis を論証すること、したがって諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展を、そのもっとも単純なもっとも目立たない姿から光まばゆい貨幣形態に至るまで追跡することである」ということに見た。これに対して、廣松は、『初版』以来の価値形態論の主たるモチーフは「価値形態、価値実体と価値量、これらのあいだの連関の発見」「価値形態が価値概念から発現するということの証明」であって「価値形態論を単にもっぱら〈価値表現の発展を貨幣形態にまで追跡〉する視界に局限して観望する弊に陥らぬよう心する……と述べている」と（36-38頁）。

端的に言えば、その課題を宇野が『資本論』第2版にいう「貨幣形態のゲネジス Genesis を論証すること」にみているのに対し、廣松がそれだけではなく、初版にいう「価値形態が価値概念から発現するということの証明」にもあるとみている、ということである。

この差異を永谷は十分承知しているのであるが、冒頭商品論での実体規定は不可能とする宇野経済学の命題（？）に阻まれてか、その差異のもつ意味

をそれ以上追究していない。ともかく、永谷の記述を追おう。

永谷は、「商品論での価値の実体規定を積極的に肯定する」廣松の論拠は「商品物神性論の新たな解釈に基づく物象化論」であり、その主張はマルクスの次の認識に依拠しているとする。

「使用対象がそもそも商品に成るのは、唯それらが互いに独立に営まれる私的諸労働の生産物であるが故にのみである。これらの私的諸労働の複合が社会的総労働を形成する。生産者たちは労働生産物の交換を通じて初めて社会的接触に入る。だから、私的労働の特殊社会的な性格もまた、この交換の内部において初めて現象する。……このゆえに、生産者たちにとっては、彼らの私的諸労働の社会的関連は……労働そのものにおいて諸人格がとりむすぶ直接的な社会関係としては現象せず、むしろ人格の物象的關係、および物象間の社会的關係として現象する」[訳文は廣松訳そのまま—永谷]。⁽⁷⁾

さらに永谷は続ける。「この文から廣松は、商品と商品との客観的關係を考えたり、商品自身に価値があると見るのは、労働の社会的関連を見失い、商品の物神性に陥った〈錯覚〉ないし〈錯認〉である、という物象化論を展開する」。

永谷によれば廣松のような解釈をすると、商品物神性論に先行する要因論、労働二重性論、価値形態論を「マルクスは商品じたいが価値をもち価値形態をもつ形で展開している以上、マルクス自身も〈錯認〉に陥っていたことになる」が、この点について廣松は「日常的私念に仮託する形での議論」であり「これまでの暫定的な分析で見えた相は……商品生産の諸關係の内に囚われている当事者たちの視座に即するかぎりでの規定性なのであり、マルクス固有の見地からするならば、それは一種独特の〈錯認〉 Quid pro quo (取り違え) であることを批判的に指摘するべき与件をなす」としている。こうして、廣松は「〈当の仮託が対自的に捉え返され……商品世界における日常的意識の批判的自己分析〉が、商品物神性論(第4節)である、という」と。

廣松の解釈をこう要約したうえで、さらに永谷は、この解釈は「問題があると思われるが、要因論での価値実体の抽出や価値形態論での諸形態の展開において、マルクスが商品所持者への言及を意識的に避け、交換過程において商品所持者を積極的に措定している事情を説明する一面をもっている。商

品論をまず商品がそれ自体で価値をもつ〈商品と商品〉（物と物）との関係で開始し、物神性論でそれが商品生産者の社会関係の物象化された姿であることを明らかにし、次に商品生産者間〔商品所持者間？〕の具体的な交換過程（貨幣の発生過程）をマルクスは説こうとしている、と見ることができるからである。この廣松の理解からすると、商品が価値対象性をもつのは抽象的人間労働が生産物へ対象化〔「対象化」？〕しているからであり、要因論で価値の実体規定〔廣松では「実体論的規定」〕が積極的に〔積極的に？〕なされねばならない。また価値形態論は商品所持者を捨象した商品自身の価値表現として展開されねばならない〔商品所持者を捨象した商品自身の価値表現として？〕ことになる。廣松からすると、宇野の実体規定を捨象した価値形態論や商品形態論は、〈価値実体論ぬきの価値形態論オンリーの謬見、S. ベイリーなどの謬見〉と同種のもの〔同種のもの？〕ということになろう」（39-40頁）と。

永谷によるこのような廣松説の解釈には、上の〔 〕書きに示したように、十全には納得しかねるが、永谷による廣松批判の検討に入る前に、永谷が廣松の物象化論的解釈をいかなる意味で肯定的に評価しているのか、みておこう。

永谷は「価値が商品の中に客観的に内在していると考えた経済学は〈錯視〉ないし〈錯認〉に陥っているという廣松の物象化論にもとづく経済学批判には、宇野や宇野派の商品形態論への鋭い批判が含まれている」と考えている。どういう意味なのか。

永谷によれば、マルクスの商品物神性論には「商品形態の物神性」論と「商品生産の物神性」論との混同がある。宇野弘蔵はこの混乱を「免れえた」が、それは「形態論に徹し商品論から物神性論を切り捨てることによってだった。実は、このやり方が価値形態論を初めて『資本論』水準から発展させることになる」〔「流通形態論」から「生産論」（『資本論』でいう「資本の生産過程・流通過程・再生産過程」のこと）へという宇野「原理論」の構成をとる方法論のことであろう〕一方「宇野の価値形態論の発展を制約することになっている」と。

つまり「宇野派の価値形態論は、一般的価値形態の等価形態にリンネル商

品を、『資本論』と同様に、置く宇野への批判以外には[貨幣形態への移行に際して、一般的価値形態における等価形態にある商品がリンネルであっては、移行の動力の問題(?)からみて不適當であるという、宇野学派内部での「価値形態論の課題」から来る問題のことであろう]ほとんど何の発展もない。それは物神性論の切り捨てと無関係ではないのではないか」というのである。

宇野「原理論」は、永谷は続ける、『資本論』の交換過程論については、「その形態論としての正しい面は価値形態論に吸収し、正しくないと思われる面は切り捨てた、と見ることができる。しかし商品物神性論については、このような検討がまだなされていない」と。

永谷は、ここで宇野の商品形態論では説かれていない「商品形態の物神性」を価値形態論で説くべきである、と以下のように主張している。

「価値形態論」節と「商品物神性」節との課題は、別個のものと考えられてきたが、「両者は実は共通した主題を秘めており、究極的には商品物神性論の商品形態の物神性の面は、価値形態論の発展の中に吸収されるべきものということになる」(52頁)。この意味で[すなわち、廣松が「両者は実は共通した主題を秘めて」いることを指摘したという意味で]廣松物象化論の意義は、マルクスと同様の混乱[永谷の言う「商品形態の物神性」と「商品生産の物神性」との混在のこと]を引き継いでいるにしても、「宇野が流通形態論に徹することによって切り捨てたマルクス物神性論の含んでいた意義を再発掘し、宇野商品形態論に突きつけた点にある」(44頁)と。

しかし、永谷の廣松説への肯定的評価がこれだけであれば、本稿が永谷論文を対象とする意味は薄い。永谷論文を対象とするのは、むしろ、廣松物象化論は「体化労働 embodied labour = 価値を真理とするのがマルクス経済学であるという、これまでのマルクス経済学界に根強かった常識をも問う」ものであると、永谷に意識されていることにある(52頁)。この課題自体については、対象としている論文では論及されていないが。

2. 価値形態論の形成と課題

永谷は、廣松の解釈には、①価値形態論の形成史にかかわる問題と、②「商

品物神性」節のマルクスと非宇野学派に共通する「混乱」についての問題、とがあるとみているようである。永谷自身が「①、②」としているわけではない。

まず、①価値形態論の形成史にかかわる問題からみていこう。

永谷は言う。「価値実体論、労働二重性論、物神性論、交換過程論は、未熟ではあってもすでに『経済学批判』（1859年）に存在したが、価値形態論は『資本論』初版（1867年）で初めて「初めて」？メルクマールの取り方次第だろう]登場し、初版付録、さらに第2版（1872年）と大きく発展・拡充していった。他の諸論ももちろん発展していったが、最も大きく変化したのは価値形態論であり、これが起動力になって他の諸論も変化したのではないかと見ることさえできる。廣松の物神性論を基点[と]する解釈は、マルクス商品論のこの変化のダイナミズムを捉えていないのではないだろうか」（40頁）。

この「変化のダイナミズムを捉えていない」という指摘は、以下の点を考慮すれば、永谷が、廣松固有の「解釈」に至る経緯を忠実にフォローしているとは言い難いことを示している。廣松が「得意げに」（廣松特有の謙遜の表現であろう）D. リカードと「忘れられたイギリス経済学者」たるS. ベイリーとのマルクスによる「両刀批判」を再発掘したのは、『経済学批判』と『資本論』の間に位置する「1861—1863年」ノートを通じてであった。その「両刀批判」を廣松自身が中世以来の「普遍論争を止揚するもの」とまで意義づけ、そこに「ゲシュタルト・チェンジ」（永谷の表現で言えば「変化のダイナミズム」）を見いだしているからである。

リカード・ベイリーに対するマルクスの「両刀批判」については、すでに幾人かの論者が（廣松説への多少の異論を含めて）論じている。⁽⁸⁾とくに廣松説について吉田憲夫が『廣松涉著作集』第12巻の解説者として論じているので、詳細は省こう。だが、廣松によって、マルクスの「両刀批判」は、リカード「実体論」+ベイリー「形態論」=マルクス「価値論」という図式的な把握のレベルではなく、また「異時における価値比較」における「アポリアの解消という域を超えて、実は存在論的理解の推転をもたらす」もの、という位置づけを与えられていることは指摘しておこう。廣松は『経済学批判』における「抽象的一般的労働」「社会的労働」概念と「再生産のために社会的に必

要な労働」概念との整合性を示すという課題，前者を「歴史的・社会的な諸関係の一結節」「社会的諸関係の“函数”」として捉えるという課題をも果たしていくものとして，価値形態論の形成史を見ていると言えよう。したがって，その再発掘の論述は，「価値形態論の課題」に対する廣松の解釈に至る経緯を論じている当のものでもある。つまり，単なる貨幣形態のゲーネジス論だけを価値形態論の課題とは見ない廣松の論拠でもある。⁽⁹⁾

永谷は，いま本稿が対象としている『思想』論文では廣松の再発掘した「両刀批判」には触れていない。⁽¹⁰⁾

こう断定するのは，フェアではないかもしれない。永谷の別著『資本主義の核心』第1章「いかに価値を捉えるか」では，註記のかたちで，有江大介の所説に關説し，『資本論の哲学』が，リカード説を「価値リアリズム」，ベイリー説を「価値ノミナリズム」とするのは「一面的である」としている。⁽¹¹⁾ だが，廣松批判を課題としたものではないとはいえ，これだけでは永谷が指摘していた正論⁽¹²⁾が永谷自身に妥当しないだろうか。

もっとも永谷は「廣松が自己の物象化論の論拠の多くを，初版や『経済学批判』にさかのぼって求めている点が気にかかる」(35頁)としていた。推測にとどまるが，価値形態論の課題をいかに見るか，宇野と廣松との差異の因ってくる源を追究すれば，廣松にとってのマルクス「両刀批判」の意義が，明確になったのではないかと思われる。永谷は，対象としている論文で「論点を拡散させないために」廣松の主張するマルクスによる「唯名論と実念論の超克」や「抽象的人間労働＝生理学的労働力支出説への批判」[これは永谷による表記]に関わる点を外し，論点を「価値形態論と物神性論」に限定していた(41頁)。したがって，「唯名論と実念論の超克」は哲学プロパーの問題として度外視するとしても，上で筆者が指摘したことは廣松による「抽象的人間労働＝生理学的労働力支出説への批判」の論点を考慮した場合には，永谷の言う「変化のダイナミズム」の論調も変わっていたかもしれない。しかしこの言い方はやや永谷に好意的な言い方である。というのは，「抽象的人間労働＝生理学的労働力支出説への批判」の論点は，当然，永谷の廣松涉批判における，本項冒頭で指摘しておいた，②の論点に関わることだからである。

蛇足ではあるが，「価値形態論の課題」に対する廣松の2重の課題という解

積は、「実体論的規定」の再措定の過程で「抽象的人間的労働」の概念も再措定されていくものとみていることにもある，ということをつけ加えておこう。『資本論』はもちろん，一般的に体系的な著作を部分的に論じることの難しさであろうが，これは自戒の念でもある。

3. 「商品形態の物神性」

次に前項冒頭で示した，永谷の指摘する②「商品物神性」節のマルクスと非宇野学派に共通する「混乱」についての問題，に移ろう。

マルクスは商品物神性論において，次のように言う。やや長くなるが，次稿以降利用することにもなるので，部分的に原語も添えて引いておくことにしよう。

「商品形態の神秘性 Geheimnißvolle は単に次のことにある。すなわち，商品形態は人間にたいして，人間自身の労働の社会的性格を，労働生産物自体の对象的性格として，これらの諸物 Dinge の社会的自然属性として，反映させ zurückspiegeln それゆえまた，総労働にたいする生産者たちの社会的関係を，彼らの外部に実存する諸対象の社会的関係 Verhältnis として反映させるということにある。この“取り違え” quid pro quo によって，労働生産物は商品に，すなわち感性的に超感性的な諸物，または社会的な諸物 sinnlich übersinnliche oder gesellschaftliche Dinge になる。……労働生産物の商品形態およびこの形態が自己を表わす sich darstellen ところの労働生産物の価値関係は，労働生産物の物理的性質およびそれから生じる物的諸関連 dingliche Beziehungen とは絶対になんのかかわりもない。ここで人間にとって諸物の関係 Verhältnisse von Dingen という幻影的形態 phantasmagorische Form をとるのは，人間自身の一定の社会的関係にほかならない。だから，類例を見いだすためには，われわれは宗教的世界の夢幻境に逃げ込まなければならない。ここでは，人間の頭脳の諸産物が，それ自身の生命を与えられて，相互のあいだでも人間とのあいだでも関係を結ぶ自立的姿態 Verhältnis stehende selbstständige Gestalten のように見える scheinen。商品世界では人間の手の生産物がそう見える。これを，私は物神崇拜 Fetischismus と名

づけるが、それは、労働生産物が商品として生産されるやいなや労働生産物に付着しそれゆえ、商品生産と不可分なものである。』⁽¹³⁾

周知のように、マルクスは上記の「取り違え quid pro quo」によって生じる事態を商品の物神性 Fetischcharakter と呼んだ訳であるが、永谷によれば、この文節にはマルクスも含め「誰も的確に指摘できていない」[すなわち永谷がその著書『科学としての資本論』弘文堂、1975年において先駆的に指摘したのだが]「商品形態の物神性の問題と資本の生産過程における物神性の完成の問題とが、一緒に混同されて論じられている」という。

どういうことなのか。永谷によれば「商品所持者と商品所持者の特殊な社会関係が、両者の交換する使用価値を商品にする」というのが「本来の商品形態の物神性の問題」である。これにたいして、マルクスが上の文節で「総労働にたいする生産者たちの社会的関係を……諸対象の社会的関係として反映させる」といっているのは、「資本の生産過程において初めて商品形態が、社会成立の一般的条件である労働の社会的配分を支配することになり、商品形態の物神性が〈社会的規模で完成する〉という」[「商品生産の物神性論」の] ことである。「人と人との関係」が「物と物との関係」として現れる、という場合の「人」は、前者の問題であれば「商品所持者であって、あくまでも特殊な〈人と人との関係〉である」。後者の問題であれば、「社会一般的なく人と人との関係」である。マルクスはこれを、あるときは「特殊社会的」にあるときは「社会一般的」な関係として説くことになっている。「そうになってしまうのは、マルクスが商品物神性論を、商品所持者が同時に生産者でもある商品生産者と想定し、〈商品生産者の社会〉論あるいは〈商品生産者の一般的社会的生産関係〉論として展開しているからである」。「一般に使用対象が商品になるのは、それらが互いに独立に営まれる私的労働の生産物であるからにほかならない」という考え方も、商品所持者を商品生産者と想定することから生じている」。この「考え方は、今なお宇野派以外のマルクス経済学を支配しているドグマである」。「以上の問題の根因は、マルクスが資本の生産過程から〈商品生産者の社会〉あるいは〈商品生産関係〉を抽象したことにある。商品論を資本の生産過程から抽象されたものとして措定する方法……自体は正しい。しかし、それを商品生産一般あるいは〈商品生産者の社

会>として抽象した方法に問題があったのである」。要するに、商品論で説ける物神性は、「前者の商品形態の物神性でしかない。ところが、マルクスは、また廣松を含む反宇野派のマルクス学派は、商品論で後者の物象化をも説こうとしているのである」(42-44頁)。

この永谷の廣松批判の論理構造は、「流通形態論」から「生産論」へという構成をとる宇野「原理論」としては論理の一貫性を示しているが、かなり単純である。

マルクスは冒頭商品論でその実体を説いている。「廣松を含む反宇野派のマルクス学派」はそれを是としている。しかし、商品論の次元では労働力商品は措定されていないのだから、まだ実体は説けない。したがって、商品物神性論においても実体に関わる「物神性」は説けない。それゆえ「商品形態の物神性」しか説けない。

これは確かに、宇野「原理論」に則した論理ではある。だが、ここでも永谷自身が指摘していた正論が当てはまる。廣松の「誤りを指摘するのであれば」廣松を「直接批判の対象とせねばならない」。必要なのは、むしろ廣松がなぜ『資本論』商品論の展開を是としたかの検討だろう。このことについては、後に触れることにして、ともあれ、永谷は節を改めて「商品形態における物神性」論を展開しているので追ってみよう。

「商品所持者の相互の関係は独特である。相互に相手の持つ使用価値を交換で手に入れようとしながら、相互の直接的接触は避けようとする。自分の欲しい相手の持つ使用価値にたいして、自分の持つ使用価値との交換の申し出を一方的におこなう。相手は自分から交換の申し出をしていないが、もしこの交換条件でよければ、やはり接触ぬきで一方的に交換を実現できる。市場経済の私的な性格もここからきている。商品所持者のこの特殊な社会関係こそが、使用価値に商品という形態を与え、商品と商品との関係や商品の価値対象性をつくりだす。商品の価値表現が商品所持者を捨象してはありえないのはこのためである」(45頁)。

「相互の直接的接触は避けようとする」という上の永谷の文言に、宇野「原理論」の文献からしばらく遠ざかっていた筆者は、正直に言って、一瞬いったい何の話かと戸惑ったが、ここで永谷が指摘しているのは宇野・久留間論

争の発端でもあった⁽¹⁴⁾・価値形態論におけるリンネル所持者の存在・その欲望に関する問題である。

永谷は続けている。「マルクスの単純な価値形態，20エレのリンネル＝1着の上着」という等式において「リンネル所持者を捨象しては，リンネルは商品でなく価値対象性をもてず，価値表現そのものが成り立たない」。リンネル所持者の「主観的な思惑のなかでしかそれは存在しない」。上の等式から「自動的に40エレ＝2着， $20 \times x$ エレ＝ $1 \times x$ 着が成立すると考えるとすれば，商品価値の物神性に陥っていることになる。……単純な価値形態をx量のA商品＝y量のB商品という一般式で表すのが問題であるのもこのためである」。「マルクスのように〈自分の商品以外のどんな商品でもよい〉と考えるなら，やはり物神性に陥ったことになる」。「われわれが単純な価値形態でそのような表象[〈自分の商品以外のどんな商品でもよい〉という表象?]をもってしまうのは，実は，現実の価値表現（価格）において初めて成立するものなのに，その面を恣意的に抽象して理解しようとしているからである」。「つまり等価商品の使用価値への欲望の捨象は価格形態ではじめて成立する関係であるのに，それが単純な価値形態へ機械的に持ち込まれていることになる。論理の誤った先取りにほかならない」。「商品形態の物神性で重要なことは，以上述べた特殊な〈人と人との関係〉が商品と商品の関係を生み出すという規定が，貨幣形態において初めて現実化する点である」。

永谷はここに「商品形態の物神性論」を見いだしているのだ。

永谷によれば，マルクスも「廣松の物象化論を支持する人々だけでなく商品物神性論を宣揚する人々も同様にこの面を見失っている」が「それはマルクスが一般的価値形態と貨幣形態との間に〈本質的な差はない〉としたことと関係がある」。マルクスの比喩は「貨幣形態（あるいは王制）とは何か，の反面を説明したにすぎない」。永谷は「この点は廣松物象化論だけでなく宇野価値形態論においても明らかにされていない」として次のように述べている。

「一般的価値形態では一般的等価形態が成立するのは，あくまでも相対的価値形態の商品所持者の共通した価値表現という〈共同事業〉による。しかし貨幣形態では，逆に金商品は生まれながらにその使用価値のままで一般的等価をとって現れる。等価形態をとる商品は金以外にはないように現れる。

そのため金以外の諸商品の所持者にとっては、最初から金以外の商品での価値表現は考えられなくなる。その結果、一般的価値形態ではその発展傾向はありながら達成されなかった相対的価値形態への金商品以外の全商品の整列が達成されることになる。／価格での価値表現においては、商品所持者は自分のもつ商品がそれ自体で価値をもち、金が生まれながらに一般的等価であると最初から思い込んで価値表現する。これは錯覚といってよい。しかし、この錯覚による商品所持者の行動は結果として、一般的価値形態を現実に成立させていることになる。いいかえると、錯覚から始まる商品所持者の行為が結果的に全商品所持者の社会関係をつくりだし、商品がそれ自身で価値をもって現れる現象を、単なる錯覚ではない社会的に客観的なものに行っているのである」。マルクスの王制の比喩も「まだく臣下としてふるまうから」という媒介が見えている間は王制が真に成立したとはいえない。〈彼が王だから自分たちは臣下〉であるとしか見えなくなったときに、真に王制が成立したといえるのである。貨幣のゲネシス自体は歴史過程に即して実証分析するしかないが、〈貨幣形態のゲネシス〉は価値形態論において論理的に解明できるし、せねばならない。／この王制の比喩は、以上の説明でわかるように、貨幣形態に適合するものである。それをマルクスは単純な価値形態の等価形態で用いている。ここにおいても貨幣形態で初めて成立する関係からの論理の先取りが起こっている」(46-49頁)。

この永谷の説明において、まず第1に気づくことは、マルクスの単純な価値形態における20エレのリンネル＝1着の上着といういわゆる価値等式自体をいかなるものとみているかである。当然、価値形態論の課題に対する見方の差異が現れる。

廣松は「等置 Gleichsetzung の関係が成立しているという所与の事態から」出発する。廣松によれば、マルクスは「二商品等置という事態……の意味する事柄を学的見地から」für uns 分析する。といっても、相対的価値形態と等価形態という対極的規定性が存立するのは「リンネル所有者の視座」からであり、「当事主体の視座が価値形態論における論理的な構制契機に入っていない」ことを意味しない。しかし「リンネル所有者の側に視座を構えるということは、リンネル所有者の意識に合致することではない。リンネル所有者が

即自的 [an sich] な意識態にあるかぎり，相対的価値形態，等価形態ということは，彼にとって対自的に [für sich] 現識 [意識?] されているわけではない。……両極的＝相補的なこの事態は，リンネル所有者という当事主体の側に視座を構えているとはいえ，あくまでフュア・ウンスに存立する学知的規定性である」とし、さらに「二商品の等置・交換の過程という事実の問題は，もとより，当事主体たる商品所有者の〈欲望〉をぬきにしては成立しない。とはいえ，謂うなれば quid juris に関わるかぎり，当事主体の欲望という対自的な意識次元は具体的な内実においては捨象されうる」と付言している。⁽¹⁵⁾

要するに，永谷と廣松との差異は，廣松の用語を用いるならば，価値形態論の展開を，事実問題 (quid facti) とみるか，権利問題 (quid juris) とみるかの差異である。

永谷が指摘している「マルクスのように，自分の商品以外のどんな商品でもよい，と考えるなら，やはり物神性に陥ったことになる」というのは，永谷は典拠を示していないが，マルクスが第2版第3節の「A 単純な，……価値形態」の最後の文節において「一商品Aの価値は別の種類のただ一つの商品によって表現されるだけである。しかし，この第2の商品がどのような種類のものであるか，上着であるか，鉄か，小麦等かどうかということは，まったくどうでもいいことである」と，「B 全体的な，……価値形態」に「転化」する際に，述べているのを指してのことであると思われる。単純な価値形態から貨幣形態への「移行」の動力をリンネル所有者の等価形態にある商品への具体的な「欲望」が捨象されていく過程とみる立場からは，「物神性に陥ったこと」になろうが，交換が成立している事態から出発するとみる立場からすれば，すなわち権利問題と見る廣松の立場からすれば，等式「20エレのリンネル＝1着の上着」の等価形態にある商品は，単なる例にすぎないのであるから，相対的価値形態にある商品以外の商品であればどんな商品でもいいことは自明である。

第2に，永谷の指摘する「論理の誤った先取り」についてである。つまり「等価商品の使用価値への欲望の捨象は価格形態ではじめて成立する関係であるのに，それが単純な価値形態へ機械的に持ち込まれていること」とマル

クスの王制の比喩は「貨幣形態に適合するものである」のに、「単純な価値形態の等価形態で用いている」ことについてである。実は、場面が異なるが、廣松はこの「論理の先取り」を認めている。ただ、第三者的に言えば、それを積極的に認めているとは言い難い。廣松は『資本論の哲学』の「価値形態の対自—対他的媒介構造」の項において、次のように述べている。

相対的価値形態にあるリンネル生産者たる「Aにとって対自的に現前するB als das Man」を以て直ちに“抽象的人間”ということとはできないし、……かかるBの生産物たる眼前の上衣を直ちに“抽象的人間的労働”の体化物ということとはできない。この種の立言が可能になるのは、第2の価値形態……にまで進んで以降である。しかし、マルクス自身、第2形態の箇所においてそのことに立ち返って注意を促しつつも……第1の価値形態の箇所で謂わば先取りしてそのことを論定している。(第1の価値形態、すなわち〈単純な価値形態〉が決して歴史的な次序で先行するものではなく、第2形態の1モメントである以上、この論理的次序に鑑みるとき、それは方法論的に許される議論の方式である。)⁽¹⁶⁾

ここで廣松は「方法論的に許される議論の方式」としている。おそらく、ことは事実問題ではなく、権利問題であるが故に、手続論的に「許される」との意味であろう。

第3は、永谷の指摘する「商品形態の物神性」が「貨幣形態において初めて現実化するという点」についてである。永谷は、マルクスも廣松も商品物神性論を宣揚する人々も「この面を見失っている」。「それはマルクスが一般的価値形態と貨幣形態との間に〈本質的な差はない〉としたことと関係がある」としていた。永谷のこの指摘は、廣松もマルクス同様、「一般的価値形態と貨幣形態との間に〈本質的な差はない〉」としているから、当然、廣松批判でもある。

確かに、マルクスは第2版において、「形態Iから形態IIへの、また形態IIから形態IIIへの移行に際しては、本質的な変化が生じている。これに反して、形態IVは、今ではリンネルに代わって金が一般的等価形態をもっているということのほかには、形態IIIと区別されるところは何もない」「進歩は、ただ直接的交換可能性の形態または一般的等価形態が、今や社会的慣習によって、

商品金の独自の自然形態に最終的に癒着しているということだけである」⁽¹⁷⁾としている。

永谷は、別の論考においてであるが⁽¹⁸⁾、マルクスが形態IIIと形態IVとの相違を見失ったのは、その相違の根拠を「交換過程論に委ね」たからであろうと推測している。そして、その相違を明確にするには形態IIIの一般的等価形態に「商品市民のなかのいわば貴族である奢侈品」を置くと明瞭になるとしている。この「奢侈品」というのは、まさしく宇野の言う「直接に消費対象になることが少ない」⁽¹⁹⁾という形態IVへ移行の動力を含むものでもあるが、形態IVにいたり、等価形態は「特権的な貴族から、今や絶対的な王」になり「欲望という私的行為は介入しえなくなる」というわけである。なるほど、わかりやすい。だが、このわかりやすさは、永谷が推測した「交換過程論」を省いたことを前提として、つまり交換過程論を価値形態論に吸収したことを前提としてのことである。価値形態論と交換過程論の関連について、ここで論及する意思はないが、筆者は、J. モスト原著・K. マルクス改訂とされている『資本と労働』⁽²⁰⁾を想起する。そこではマルクスは、価値形態論と交換過程論を（「学校教師風」から）さらに平易化して（?）、両者を結びつけて説いている。

永谷の指摘が、一般的等価形態にある奢侈品と金との（貴族と王の比喻が妥当かどうか？）形態の差異からくる物神性論の差異を言っているものであるとすれば、それは、事実問題としては、正論であろう。だがいずれの形態もそれらが「共同事業」（廣松の用語では「間主体的・（共同主観的）な」行為になろう）の結果であるとするれば、両形態には「本質的な差異」はなく、貨幣形態への「移行」は事実問題に属する事柄であろう。⁽²¹⁾

結びに代えて

以上、極めて不十分ながら、永谷の積極説の半分までをみてきたが、これまでの部分に限って言えば、永谷の廣松批判は、廣松が商品論にみたプロブレマティク自体に対するものというより、宇野「原理論」の構成に立脚したうえで批判でしかない、と感じざるをえない。また廣松物象化論を「体

化労働 embodied labour = 価値を真理とする……常識をも問う」ものとまで意識している永谷が、「価値の実体論的規定」あるいは括弧付きで「〈価値実体の論証〉」などと表記されている廣松の用語法に注目しなかったことも不可解である。永谷による「廣松の所説」を要約した際に、筆者が〔 〕書きで入れた「実体論的規定」「対象化?」「積極的?」等々は、こうした意味合いである。

廣松の「商品論」解釈は、事実問題を無視しないとはいえ、価値形態論の把握にみられるように、あくまでも「弁証法的論理展開の構制」に基軸があり、そのかぎりでは論理主義的である。哲学者・廣松であるから、事実問題 (quid facti) ・権利問題 (quid juris) という語に I. カントに由来する何らかの意味合いを含ませているものと推測するが、さしあたり悟性認識的レベルでそれを歴史事実的問題と論理的問題というかたちで捉えてもそう異論はなかろう。であるとすれば、この問題は当然にも、旧くから論議されてきた冒頭商品の性格規定の問題に関わるはずである。廣松はその点に関して、別の著書であるが「冒頭商品の歴史性をめぐる往々にして不毛な争論」とし「端初商品がそのまま体现した商品は—〈言語〉そのものをそのまま体现した歴史的言語が実在しないのと同様—実在しない」としている。⁽²²⁾ つまり、論理的展開と歴史的発展との関連問題総体は別としても、狭く「冒頭商品の性格」規定に関するかぎり、廣松はいわば論理主義を貫いている、⁽²³⁾ ととれる。

ところで、永谷が指摘していたマルクス商品物神性論における「混同」の問題は、宇野「原理論」の形成要因の1つであると思われる・マルクス商品論における「商品生産者の社会」の「想定」の否定にあった。だが、実は廣松も、「商品生産者の社会」という言い方ではないが、少なくとも価値形態論においては、以下のように、マルクスによる「直接的生産者」の“想定”を是とはしていない。

「価値形態論にとっては、リンネル所有者および上衣の所有者という両当事主体は、直接的な生産者たるを要しない。(彼らが共同体の代表者であろうと仲買商人であろうと企業的“法人”であろうと、このような歴史的現実性の次元は問題外である。ここでは形態論的に抽象化された準位での論考が展開されうれば足る。しかしながら、われわれも敢えてマルクスの響みに倣って、

両当事者を直接的生産者であるものとして議論を進めよう)」⁽²⁴⁾と。

文末の文言は、廣松説が「護教的」と呼ばれる所以かもしれぬが、それはともかく、既に、廣松自身が宇野学派との差異を「弁証法的論理展開の構制」の差異においていた⁽²⁵⁾ことを考え合わせれば、永谷にとっては、ここからが批判の対象だったのではないかとも思われる。

永谷に限らず、経済学サイドから廣松の『資本論』解釈が論じられる場合、「固定化された分業体制」のもとでは致し方ないことかもしれぬが、少数の例外を除いて、廣松の主著はもちろん『弁証法の論理』⁽²⁶⁾にふれられることはほとんどない。そもそも経済学サイドで方法論 Methodenlehre などといっている、哲学者たちから見れば、所詮は手続論 Verfahrungslehre / Verfahrungsweise でしかない⁽²⁷⁾、のかもしれない。ともあれ、永谷清の言う「商品生産の物神性」の問題は、「価値法則の論理性と実在性」の問題とともに、次稿以降の課題である。

註

- (1) 廣松渉編『資本論を物象化論を視軸として読む』岩波書店、1986年、vi頁。
- (2) 同著『マルクス主義の成立過程』至誠堂、1968年、所収。
- (3) 山口重克『価値論・方法論の諸問題』御茶の水書房、1996年。鎌倉孝夫・中村健三『「廣松哲学の解剖」—「関係の第一次性論」の意味』社会評論社、1999年。
- (4) この論文は『思想』誌、第875号、1997年10月号に掲載されたものであるが、同著『労働価値説から価値法則へ』御茶の水書房、2001年、に収められている。引用は同書よりおこない、該当頁は煩雑にならない限りで本文中で示す。なお、引用句中の圈点や「」括弧等はこの書に限らず、適宜、〈〉で表したり省略する。
- (5) 「第三者」と記したが、『資本論の哲学』に衝撃を受けた「第三者」であり、廣松物象化論の立場に傾斜した「第三者」のコメントであることも、また『廣松渉著作集』全16巻（岩波書店、1996—97年）もすでに刊行されており、時機を失したものであることも自覚している。永谷の上記『思想』論文に対しては吉田憲夫が、廣松と永谷の差異を「弁証法的論理展開の構制」に対する「諒解の差異」に見て反批判している。吉田「商品の物神的性格とその秘密—永谷清氏の所説に言寄せて」『情況』誌、1997年10月号。
- (6) 平田清明『経済学と歴史認識』岩波書店、1971年、他。
- (7) MEW, Bd.23, S.87, (Neue MEGA, II/6, 1987, S.103-104)。邦訳は多種あるが（最新では『マルクス・コレクション』IVの今村仁司・他訳『資本論』第1巻上、筑摩書

- 房, 2005年。この【コレクション】Ⅲの【資本論】第1巻初版「第1章」訳には惜しいことに脱漏がある), いずれの邦訳も Ding / Sache や Beziehung / Verhältniß 等を訳し分けていないケースもあり, 必ずしも訳文には従ってはいない。
- (8) 竹永進「S. ベイリーの価値論と60年代初頭のマルクス」『経済学雑誌』第77巻, 第1号, 1977年。有江大介『労働と正義』創風社, 1994年。
- (9) 廣松渉『資本論の哲学』[増補版] 勁草書房, 1987年, 104-107頁。「再」発掘というのは, 周知のごとく, I. ルービンという嚆矢がいたからである。
- (10) 永谷は別著『価値論史の巨峰』世界書院, 1986年, においも「ベイリーのリカード批判」を論じているが, 参考文献にもあげていない。
- (11) 永谷『資本主義の核心』世界書院, 1997年, 34頁。
- (12) 永谷『労働価値説から価値法則へ』前掲, 「宇野の誤りを指摘するのであれば, 宇野を直接批判の対象とせねばならない。【資本論】の正しい解釈を示しても, 宇野批判としては不十分である。平田清明や廣松渉の宇野批判には, この面がないだろうか」(35頁)。
- (13) *MEW*, Bd.23, S.86-87, (*Neue MEGA*, II/6, 1987, S.103)。
- (14) 向坂逸郎・宇野弘蔵編『資本論研究』至誠堂, 1958年。初版は1946—47年。
- (15) 廣松『資本論の哲学』前掲, 132-133頁。
- (16) 廣松, 同書, 140-141頁。
- (17) *MEW*, Bd.23, S.84, (*Neue MEGA*, II/6, 1987, S.101)
- (18) 永谷「価値形態の展開」佐藤金三郎・他編『資本論を学ぶⅠ』有斐閣, 1977年, 185頁。
- (19) 宇野弘蔵『経済原論』岩波全書, 1964年, 28頁。
- (20) Most, Johan, *Kapital und Arbeit*, Chemnitz, 1876 in *Neue MEGA*, II/8, 1989, S. 741-742 (大谷禎之介訳『資本論入門』岩波書店, 1986年, 9-14頁)。
- (21) 本文での筆者の「事実問題であろう」という言い方は, 曖昧である。ありていに言っ
て, 価値形態論・交換過程論の【資本論】初版本文・同付録・第2版という展開を追っ
てはみたものの, 現時点では, 初版本文の第4形態・第2版の貨幣形態・両版でほと
んど異同のない交換過程論とを整序されたものとして自身で再構成していないから
である。
- (22) 廣松『マルクス主義の理路』勁草書房, 1974年, 68-69頁。
- (23) かつて佐藤金三郎は日本におけるマルクス派の経済学の潮流を, 当時の西ドイツの
潮流の分類を軸に, 日本の「正統派・宇野派・市民社会派」等の軸を交錯させて, 「三
派6流」にあると評した。(佐藤金三郎「マルクス研究と現代」『経済セミナー』誌,
第243号, 1975年4月, および同「【資本論】研究の現状と展望」同誌, 291号, 1979年
4月号。いずれも高須賀義博編『シンポジウム「資本論」成立史』新評論, 1989年,
所収。佐藤が扱った当時の西ドイツの潮流の文献は Backhaus, Hans-Georg, “Mate-

rialien zur Rekonstruktion der Marxschen Werttheorie 3,” in *Gesellschaft 11*, Suhrkamp, 1978. であると思われるが、筆者未見)。この佐藤の分類が妥当か否かは議論のあるところであろうが、廣松の『資本論』解釈が佐藤の「三派6流」の分類には収まらない「改釈」であることは、(経済学分野には限定されない)「廣松シュレー」なる語が登場したことにも示されている。

- (24) 廣松『資本論の哲学』前掲, 139頁。
- (25) 廣松「『資本論』解釈の齟齬」『現代の眼』誌, 1975年8月号(廣松涉著・吉田憲夫編『物象化論と経済学批判』廣松涉コレクション, 第4巻, 情況出版, 1995年, 所収) 290頁。
- (26) 廣松涉『弁証法の論理—弁証法における体系構成法』青土社, 1980年。
- (27) 廣松涉著・吉田憲夫編, 前掲書, 227頁。

(Feb., 2007)